

第4回青森県生涯学習審議会会議録

日時	平成25年10月30日(水) 14:00~16:30
場所	青森県警察本部 6階 教育委員会室
出席者	<p>《 委員 》 敬称略 12名 (欠席3名)</p> <p>太田 博之 浮木 隆 斉藤 雅美 境 香織 佐藤 江里子 澁谷 尚子 田頭 順子 原 英輔 小笠原 彩子 三上 雅通 山上 恵子 横内 清信 (野呂 徳治) (工藤 秀美) (中上 千壽子)</p> <p>《 県教育長 》 橋本 都</p> <p>《 事務局 》 5名</p> <p>中野 聖子 (生涯学習課長) 中嶋 豊 (学校地域連携推進監) 渡部 靖之 (企画振興グループマネージャー) 他2名</p> <p>《 その他 》 2名</p> <p>伊藤 直樹 (学校教育課 学校教育企画監) 大瀬 雅生 (総合学校教育センター教育活動支援課長)</p>
内容	<p>1 開 会</p> <p>2 教育長挨拶</p> <p>3 案 件 (1) 各委員による聞き取り調査の報告 (2) 生涯学習審議会報告書(または提言)の作成について (3) その他</p> <p>4 課長挨拶</p> <p>5 閉 会</p>
配付資料	<p>次第 青森県生涯学習審議会委員名簿 座席図</p> <p>資料1 第11期生涯学習審議会委員による聞き取り調査報告 資料2 聞き取り調査の情報整理表 資料3 第11期生涯学習審議会スケジュール</p>
資料	<p><情報提供資料></p> <p>「BLUE VOL.02」(BLUE TOKYO)</p> <p>「弘前りんご映画祭2013」(まちなかりんごだらけ実行委員会)</p> <p>「子どもの読書活動推進県民大会」(生涯学習課)</p> <p>「響 No.97」(青森県総合社会教育センター)</p> <p>生涯学習・社会教育関係職員研修講座「公開講座地域コミュニティの活性化！」(青森県総合社会教育センター)</p>

記号：◆委員 ○事務局

(1) 各委員による聞き取り調査の報告

※資料1の掲載順に、各委員より聞き取り調査の概要について報告

質疑応答

- ◆ 2つの団体の代表の方の年齢を伺って、つるた街プロジェクトの代表もそうだが、SNSを利用しているという話であったので、若い方が活動されているのかと思った。
- ◆ つるた街プロジェクトについては興味を持って拝聴した。
- ◆ ここまで大きな活動をするにはパワーも必要だし、人から協力を得たり、広告の仕方も創意工夫されているのだと思う。鶴田町をどうにかして生き生きした町にしたいという思いから始められて、どういう人にどうやって声をかけて広げていったのかを伺いたい。
- ◆ ご本人は落ち着いた物静かな感じの方なので、「やれる範囲でやっていければ」という返答であった。学習の機会である県や市町村が実施する講座などの情報はインターネット等で集め、出かけて行って質問や相談をすることで人脈を広げたり、支援を得たりしていると伺った。
自分が小さい時にはもっと地域に楽しいことがあったのに、最近は町が寂しくなったと感じ、まずは10年後を想定して自分は頑張りたいという想いと、活動には小・中・高の生徒にも参加してほしいのだとおっしゃっていたのが印象に残った。
- ◆ 須恵器の里かっちゃんの会の報告書では、学習機会の充実の部分に、女性の方が学ぶ機会が多く男性の学びの機会が少ないが故に、女性の活動に理解がないという記載があるが、具体的な話は伺えたのか。
- ◆ 調査対象者は農家の方であるが、農家の女性の中には、夜に会合があつて出かけようとする、どんな理由があり、なぜ集まらなければならないのか、家庭での理解が得られない場合がある。それは男性にとって地域のことを話し合うような会合の機会がないから、わからないのではないかとおっしゃっていた。自身はJA婦人部の活動が始まりであったが、男性にはそのような機会がなかったということも伺った。
この話は、会社員の夫が社会的な学習の機会があるのかと考えた場合、共通する部分があるのではと思った。例えばPTAの役員をやっている母親がPTAの活動や会議に出かけようとするに対して、父親が理解を示さないこともあると思われる。
- ◆ 以前、ワーク・ライフ・バランスの話をしたが、実は根本から男性が理解しておらずネックになっているという話に、ちょっと考えさせられた。
- ◆ 今はそういうことはないのかもしれないが、ある年代の農村地帯では、以前はそうであったという話であった。代表者自身は旦那さんが青年団の活動をしていたこともあって、理解がある人だったそうだ。

(2) 生涯学習審議会報告書（または提言）の作成について

- 資料2及び資料3について、事務局から説明。

- ◆ 生涯学習というと、まず最初に思い浮かぶのは、講座や講習会にいろんな人に来てもらって学んでもらおうということなのだが、今日の調査報告では、ある人が中心になって活動を立ち上げたという話が多かった。
リーダーとなって活動を立ち上げた人たちの例から何かを生み出すのか。あるいは講座や講習に人を集めるための要因を探るのか。方向性を明らかにしてほしい。

- 最終的には学びを生かす場の設定や仕組みをどう作るべきかについて提言していただきたい。また、学びを生かすためには、何をどうしたらいいのかについて、生涯学習審議会として行政向けの意見を作っていただきたい。講座も含め、県民の皆様に学びを生かす場を提供し、活性化していくためにはどうしたらいいのかについて、今回の聞き取り調査からご提言をいただきたい。

- ◆ 活発に活動されている方々が、活動を始めるにあたって何かの入口があり、学ぶ中で今の活動に到達したという考え方でいいのですね。
そのような例を踏まえて、最初に何をどうすればいいのかを提言するということがいいのか。

- ◆ 学びを生かすといったとき、「生かす」とはどういうことを指すのだろうか。今までの審議の流れから、学ぶことによって人材育成を図るとした場合には、どういう人材を育成するのか。学んだ人間が豊かになって、何かを地域コミュニティの中で生かすことは十人十色だと思うので、これをひとつにまとめ上げることは難しいと思う。

- ◆ 報告書をまとめるため、まずは素材をテーブルに載せて、これをどう見出しに合わせて文言化・提言化していくか。それを表現する際に、目的とする我々の共有部分がバラバラになると上手くいかない。

- ◆ 調査シートの内容だが、調査に行った際に趣旨というか、コンセプトがもっと事前に分かると答えやすいという意見を頂戴した。たとえば、質問の6にあった、地域の活動をしながらも、さらに学習することが大事だと思ったかという設問は、意識が高い人だからこそ多くの取り組みをされているのだと思う。聞き手としては、その中でもっと掘り下げて聞きたいことや、引き出したいことがある。具体的なものも含めて提案していただければ、イメージが湧きやすいと思った。

- ◆ 何らかの提言や報告書を作るにあたって、聞き取り調査では多種多様な意見が出されているのだから、何かひとつに収斂させることはできないと思う。調査を担当した委員から、それぞれの調査対象者について、どういう意味で学びを生かしていたのか、あるいは生かそうとしているのか、いろいろな例を挙げていくしかないと思う。

- ◆ そういうやり方でいいと思う。

- 無理に集約をしなくても、この事例ひとつひとつが提言になるという考えもある。

◆ どちらを向いているかはそれぞれ違う。

○ 地域のためということであればいいと思う。

◆ ひとつ感じたことは、「一歩足を踏み出して講座などに参加し、成長していった、最後は講師になるのが目的」というのがあったが、成長していけるような中身であるかどうかということもある。ただ単に知識を身に付けるだけではなく、どう成長してやる側や引っ張る側への成長が期待できる中身が必要だと思う。

◆ 資料2の学びの種の拾いやすさについては書きにくいと思う。特に内的要因などは、小さい時からそうだと行ってしまえばそれまでなので、こうであった方がよいという内容を提言にするのは難しいと思う。対して、経過などは聞きやすかったし、どういう風に充実した機会があったのかも聞きやすかった。

学習意欲の喚起の部分で、共通項としては「生かしていく」ではないか。私が話を伺った須恵器の里かっちゃの会では国道沿いに花を植える活動を実践し、作業すること自体が地域コミュニティになっている。他で見たことを自分の地域に働きかけ、やっている所を見た人が参加するという動きになった。

また、自分でいろいろな事実際に取り組むことで理解を深めていき、そこからもっとこうしたいというような想いが生まれ、次のステップへの希望が出てくる。

NHK文化センターの報告でも出ていたが、60歳代や70歳代が引っ張る側になるのだと思う。

意欲の喚起あたりが中心になるような報告書を作ったらいいと思う。

◆ 表のアの部分は内容も少ないので、先にイの社会活動の実践者の経過を見て、共通意見はあるだろうか。提言に欠かせない考え方について意見を出していただきたい。

◆ 同じ考えの人がいるということに気づくことが大事だと感じた。人のことを見て自分もやってみようとか、その人に賛同することが気づくということなのだった。

提言といわれたときに、ひとつにまとめられるのかと思ったが、考え方には2種類あると思う。NHK文化センターの話の内容は私もすごく感じていて、自己表現する場がないとフラストレーションがたまったり、やったことを誰かに認めてもらいたいという気持ちはあるのだと思う。

自己表現を目的とする考え方がひとつで、身近な友人の話では、学びを生かすことよりも、学んでいることに安心したいという気持ちがあるそうで、例として結婚、出産、子育てをしている傍ら、通信教育で資格を取るとするのは、子育てのために仕事も辞めて家にいると、世の中から隔離されてしまいそうで怖い、何か学ぶことによって社会とつながっていると感じたいから学ぶのだということを知ったことがある。

あるカフェで、月をテーマにした集まりがあったのだが、フラッと参加した人は、そこでその時間を過ごすことが幸せであると感じたそうで、必ずしも学びの先に表現の場を求めるものばかりではないこともわかった。

あるCMのキャッチコピーで「やりたいことは英語の先にある」というのがあり、実践を伴わない英会話は身につかないという考え方から、例えば医療なら医療の現場で使われる用語を交えた会話の学習を、観光アテンダントを目指すなら観光に必要な英語を勉強することで上達するように、英語を何に生かしたいのかによって、必要なプログラムを組んでいる。つまり、学びの先に何をしたいかを考えることによって身

に付いていくものなのかもしれない。先につながっていくものなのではと思ったときに、発表の場や、何かを創造する、あるいは発表するだけ、誰の目にもとまらないとしても、それだけでさっぱりすることもある。発信することにつながっていくことを求めたり、何かの役に立ちたいということもあるだろうから、すべてをひとつにして表現することはできないだろうと思う。

学びの先に何かを求めるパターンと、先がなくとも幸せというパターンがあると思った。

- ◆ つがる市歴史散歩の会の報告書に発表という言葉が出てくる。やはり発表の場は確保しなければならないのだと思うし、そこに行くために、最初のステップからひとつの流れになって行くのではないかと思う。

提言という少し構えてしまうが、まさに先程の話は提言になると思うし、そこからどう落とし込みをしていくか、その材料は資料としてここにもあるし、たぶん皆さんの頭の中にもご自身の活動としても持っていると思う。こういう形でというイメージは取り払っていただきたい。

「同じ考えの人がいるということに気づく」という言葉は大事な部分だと思う。最初からこの人と考えが同じだからこの講座で会ったというものではないと思う。いろんな活動をしているときに、ハッと気付くのだろう。これは生涯学習のいいところかもしれない。目的はそれぞれに持つのだが、どこかで同じだと気付くのだと思う。

- ◆ 報告を見てそれぞれの委員の内容から拾ったのは、まず、一步を踏み出すためのエネルギーが必要であったということが出されており、楽しさや面白さ、好奇心はハードルを越えるときのエネルギーになっている。

もうひとつは高い理念や理想というものが共通するものとして見えた。その時に自分だけではなく仲間であったり興味関心を同じくする人がいたし、理解者もいた。こういったことでスタートしていったのではないか。

ひとつ何かをやると成就感や達成感が生まれ、レベルアップして次の活動へ進む時に行動力の広がりも出る。こういう取り組みが人脈を広げていく。続けていくことで、取り組みを次に伝えていく後継者を育てることも大事なのではないかということを読み取った。すべてにあてはまるものではないが、こういった意識が出てきているのではないかと思った。

これが提言ではないのだが、聞き取り調査の結果から、私はこう感じた。

- ◆ 生涯学習への提言は、さまざまなツールや活動の基盤としても使えるのではないかと感じた。例えば色々な立場の人がいて、仕事をしていたり、これから生きていく上でどうしようと悩んでいる人がいたり、人によって考え方は違うと思うが、この生涯学習そのものやきっかけを見たり知ることによって、同じような事ができるかもしれないという気付きや、活動のきっかけの参考として使えると思った。

- ◆ 我々の提言は行政に対して報告するので、こうすると学びの種が拾いやすくなるとか、こうすると参加者の中からリーダーが現れて充実していくのだとか、その中において学習意欲の喚起にはこういうやり方があるとか、例えば発表の場があるとか、地域で生きるような組織作りとか、仕組み作りをするなどということに記載するものだと思う。

確かに今でもやっているのだが、実際にはそれがなかなか前に進まないで、2年

毎にメンバーを変え、生涯学習の現状を把握し、報告書にすることによって、少しでも政策提言として書ければいいのではないか。

我々が生涯学習の中身を決めるのではなく、生涯学習の在り方自体の提言をするのだが、雑駁に何を書いているのかということとわかりにくいので、我々が今回調査項目で挙げたものを、ひとつの見出しとして組み上げていこうとしている。

逆に言うと、いろんな意見が出過ぎてしまって、いろんなジャンルの人からいろんな意見を頂いたので、ややまとめでくいと感している。

- 今までは施策に対する提言を出していただいていたが、今回の調査結果を見ると、まとめきれないほど広い内容なので、提言ということに必ずしもこだわらなくてもいいのではないか。例えば県民向けのアピールを作ってもよいと思う。
- ◆ 我々審議会から県民に向かって、こんな考え方で、こんなことをしてみんなで地域を盛り上げようというような呼びかけや訴えでもいいという案で、これは行政も受け止めることができるだろう。今までそのような報告書はなかったのではないか。ただ、主語が「県教育委員会」でなく「あなたは」にして、こうするべきだと書けばいい。
- ◆ NHK文化センター弘前の場合、高齢の女性だけが講座に来るイメージだが、男性が集まる講座もある。それは地域の歴史に関する講座で、ひろさき検定を受けたい人が来る。学びの生かし方として、ボランティアガイドになったりする目的がある。こうした学びによって資格を取り、資格を生かした活動につながるような内容を書けば、参考にしてやってみようと思う人が増えることも考えられる。
- ◆ NHK文化センター弘前支社長の話の中には、文化という言葉が出てきたり、委員の発言の中には幸せという言葉が出ているが、資料のアの中には幸せという言葉は出てこない。というのは、実はもう幸せを感じているからあえて調査の時に言わなかっただけで、実際は人と関わりながら自分が学んで、それを地域にフィードバックできたときはうれしいし幸せを感じているはずである。生涯学習は地域づくりの根源にあるのだろうが、個の部分では幸せなんだろう。だからこそ旦那さんにも理解してほしいだろうし、できれば一緒に取り組めるものがあれば楽しかったり、もっと幸せになれるのだろう。
- ◆ ゴールはひとつではないのだろうと思う。生涯学習で学ぶことで収入を得られるようになる人がいるかもしれないし、ボランティア活動で観光客の方に喜んでもらえる活動も完成形のひとつであると思う。また、ステージで表現するなど、それぞれのゴールの形があっていいと思う。

どういうきっかけで学びたいと思うのかの入口として、例えば何かを見たときに、こういう人になりたいとか、この人カッコイイとか素敵だなとか、実物を目にしたときに、どんなパンフレットを見るよりもそれに対する学習意欲が湧く。

成功事例をお見せするのが、一番の学習意欲の喚起になるのではないかと思う。
- ◆ ここに挙げた人たちの話を、今回の取材報告のような間接的な手段ではなく、ここで実際に会って直接話を聞きたいと思う。それが一番影響を受けることができる手段なのだと思う。私は仕事柄それを誰かに伝えなければと思うのだが、舞台だったり音楽だったり、よく話題に出てくる、青森が産んだ青森で活躍する人たちを生で見るこ

とができれば、あのようになりたいという目指すものが見えて、一番説得力があると思う。

- ◆ 実はそういうことは、ありそうでない。きっかけがあつて、経過があつて、学校だとよくあるような先輩の顔写真と体験談を載せたものが、生涯学習に関する分野のパンフレット等では少ないと思う。この手法は効果があると思う。この方はこの講座や学びの内容から今どういう活動をしているという話は、案外あとから聞く話であつて、きっかけとしての講座の入口のことや、一步踏み出した時のことを書いているものは少ない。今回の調査対象者を選ぶことになったのは、普段からそういう人がいるんだということがわかっていて、実際に聞きに行つてすごいなと思ひ、これまで思いをやっぱりそうであつたかという確信に変えることができたのだと思う。
- ◆ 地域というものを考えるとき、人との関わり合いも欠かせないものだと思う。自分がこうなりたいというのももちろんあつて、自分の幸せ感とか満足感を追求するということもあるのだろうが、地域となると人とのかかわりが欠かせないので、関わりの中での幸せや満足を感じるという感覚は、また独特のものだろうと思う。
- ◆ 鶴田のように小さな範囲で、強固に地域と密着している例はある。
- ◆ 男性に学習意欲や社会参加意欲がないわけではない。満足感や幸せ感、達成感を感じることが目的だとすれば、それを助けるためどんな学習機会の提示や喚起ができるかを提言とするのだと思つていた。審議会の中で提言するということは、ある程度政策も絡んでの支援ということをイメージすればよいのか。
- ◆ もちろん政策として行政に出すことが前提である。
- ◆ ある程度政策に反映させることを念頭に提言が書かれればよいとわかつた。生涯学習の本当の目的は個人的なことなのだろうが、審議会として答申するのであれば、行政がどこに手助けが可能かということ念頭に置かなければならないとも思つた。先ほどの議論では、そうではない書き方もあるという話も出たので、県民向けのアピールでもいいのかなとも思つている。
- ◆ 生涯学習が一步でも前に進むように、我々の考え方、この審議会でも話してきたことを公にする。それは、行政向けでなくても、県民に向かうものであつてもメッセージになると思う。
- ◆ 今回の審議会が一番最初で、今までよりも一步進んだというところは「学習から実践へ」という部分で、なにか必ずしなければならないというものではないが、学んでそれっきりではなくしようという考え方を持ち、講座の数を増やそうとか、講座に何人参加したからとかいいというレベルではないという話からスタートした。だとすれば、どういうことが考えられるのか。
- ◆ 第1回の会議では、チラシひとつにしても、県が出すものがデザインも今ひとつで内容もわかりにくいし、こんなものを見るのは誰もいないのではという話から始まつた。例えば職員だけが作るのではなく、広告代理店を入れてコンセプトに合ったチラ

シを作るとか、中にはチラシすらないということもあった。そんな話から始め、これまで積み上げてきて、実践者の話を聞くという調査報告まで来た。

- ◆ 評価を得て、モチベーションが上がり、次のステップに行こうというのがあるのだとすれば、そのような部分を行政に実施してもらおう。いままでは講座を開くことだけだったものを、そうではないという提案をすればいいと思う。

つるた街プロジェクトの話にあったように、自分のやっていることが認められることで正しいことをしているというお墨付きをもらったような気分になることと、その評価が仲間に認めてもらう材料になることで、次のつながりづくりにつながっていく。きっかけとして社会教育センターの講座があったのだとしても、それに付随したサポートもあったであろうし、それによってやりやすかったということがあるのだとすれば、いい例だと思って聞いた。

でる・そーれではシャベリ場といって若い人たちが集まり、いろんなことを話すのだが、言いつばなしで終わってしまうのはもったいないと思っている。次のステップに行くための手助けをすることが、行政にできるのではないか。

- ◆ 小さなブースでちょっとずつ成果を見せ合うというような、例えば和食をやっている人は和食に関することを、小物づくりの人だったら、ワークショップだったりクラフト系の所で実践していることを、音楽をやっている人はステージなど、自分たちの街おこしをしている人は発表をするようなものをたくさん集めた青森フェスのようなイベントを計画し、そこに集うようにして、こういうことはウチでもやれるかなというヒントになるような意見交換をできるようにすれば、そこから収益を上げることができる人も出るだろうし、別の人とコラボレーションを考えることができる機会を与えることもできる。これを全県レベルでやったら面白いと思う。

- ◆ 生涯学習フェアというイベントはやっている。県民カレッジが主体で、単位認定の授与式があったり、県民カレッジの講座の人たちの発表会があったりする。

あまり知られていない。

- 県ではこれまでも生涯学習・社会教育の考えからさまざまなことをしており、生涯学習フェアは総合社会教育センターで実施している。生涯学習の講座に参加している方々がいろんなことをしている。参加者の固定化や広がりやのなさが問題になっている。

審議会委員が2年で交代していくが、その時々々の生涯学習推進のためには何が必要かを話し合っていたり、調査していただいて報告書をまとめ、教育長に提出する。その中からさらに推進すべきものを抜き出して施策に生かしていくスタイルでやっている。

今回は皆さまから意見を出していただくのに、うまく方向付けができないが、生涯学習は範囲が広く、参加する人もいれば実践して引っ張っていく人もいる。年齢層もやる内容も広いし、民間でも行政でもやっていることもあって広い範囲になっていることが意見を出しにくい理由のひとつになっている。

今回調査していただいた報告はア～オに視点を分けていただいたので、報告書にまとめる際は、この部分は取り上げてほしいとか、詳しく記載してほしいとかの意見を頂ければいいのではないかと考えていた。

生涯学習は範囲が広いので、方向づけの難しさがある。本日はいろいろな思いを出していただければ、次回に向け事務局でまとめさせていただきたい。

- ◆ 今日の資料から共通の意見を抜き出してみるのは、皆さん理解していただいていると思う。今皆さんが考え込んでいるのは、これまで我々が話し合い、考えてきたことも報告書に盛り込んでいいのか、今日の資料からピックアップして、これだけを材料として報告書は作れるものか、はたしてそれでいいのかということで皆さんの議論が止まっている。

皆さん自身の経験と、今回調査した中から「生涯学習はこうあるべきだ」という意見をまとめた今回の資料を見た段階で、今後どうまとめたらいいかと考え込んでしまった。もっと集約した形でたたき台にした方がわかりやすかったらと思う。しかし、事務局が作成した資料は、どれも貴重な意見であり、最終的にこれらの意見を報告書につなげていくのが当然だと思うが、今日ここでこの資料を整理して、まとめてしまっているのかという思いが皆さんにはあるから、議論が止まっている。

- ◆ 誰が見るのかによって報告は変わる。

今回の調査先は「典型」であって、ここまでやれる人がいたらすごいという人たちを調査し、例として挙げたのだが、あまりにも「典型」すぎる。

行政でやろうとすることは、一般県民をいかに生涯学習の場に参加してもらうかということが一番メインになる部分だと思う。その様な観点で典型をどう生かすか、これから参加しようとする人たちの例になるようなことを拾い集めて、呼びかけのような提言に繋いでいけばいいと思う。

今回の調査対象は皆さん素晴らしい方ばかりで、これらの内容をすべて報告書に織りこむのは無理があると思う。どの部分を拾って提言にするかだと思う。先ほど出たように、学ぶこと自体が幸せになる方と、次を目指すことで達成感を感じる人もいる。「やりたいことは生涯学習の先にある」というようなイメージが、一番訴えかけやすいと思う。内的要因でも外的要因であっても、最初のハードルをいかに下げ、一步を踏み出してもらうかが共通していることであって、そのときに訴えかける言葉や内容としてはぴったりしていると思う。

- ◆ 本日の話し合いによって、今一度皆さんの中でこれまでの経過を振り返り、生涯学習の深さについて再認識することができたのでよかったと思う。

次回の会議では、どういう方向で提言までまとめていったらいいか、事前に事務局と相談しながら、さらに個別に皆さんからも意見を頂いた上で臨みたいと思う。

- 基本は政策提言で作るということでよろしいか。

- ◆ それでよい。その中には最後は県民に向けてのメッセージを、我々のことばで作って入れたい。

(3) その他

※資料3に基づき、今後の予定について説明

※参考資料による情報提供